

歩いて再発見 青島の奥深さ

「風景街道大学」講座

海水浴場や、海幸彦・山幸彦神話の青島神社で知られる青島。新たな観光資源を発掘しようとして11日、地域づくりを考える会が町歩きを開いた。行政関係者や観光業に携わる人たち約60人が参加。古い道を通り、歴史ある店をめぐるながら隠された魅力を探った。



熟成したもろみを搾り、生じょうゆが出てくるのを見る参加者―宮崎市青島

青島の町歩きは、住民団体や宮崎大、行政機関でつくる日南海岸地域シーニックバイウエイ推進協議会などが主催する「日本風景街道大学」の講座の1コマ。11日午前9時すぎ、青島駅前に参加者が集まった。宮崎出身で福島県に赴任している国土交通省の男性職員、横浜市のカラーコーディネーターの女性など肩書や居住地はさまざま。

散策は、4班に分かれて始まった。古い住宅街に繰り出した班は、新婚夫婦のシャンシャン馬が鶴戸神宮参詣で通ったという旧鶴戸街道を西へ。家々の前の石像に花が供えられていた。参加者は「大事に守ってきたんだらうな」。近くの茂みには、1913（大正2）年から50年間走った青島軽便鉄道の橋台の一部がひっそりと残っていた。

国道220号に出ると、1902（明治35）年ごろ

昔ながらの鍛冶屋・醤油屋に感嘆

から続く富永鍛冶屋へ。3代目富永良也さんのもとには、親から受け継いだ包丁を研ぎにくる人も。「こんな古い鍛冶屋さんがあったとは」と参加者からは感嘆の声が上がった。1877（明治10）年創業で「カネナシじょうゆ」「カネナみそ」を製造・販売する長友味噌醤油醸造元では、搾り立ての生じょうゆを味わった。次期4代目塩見裕一郎さんは「いまも青島の家を1軒ずつ配達している」と説明。麴から造るのは手間がかかるが、「ここで搾った原液がうちの味なのでやめられない」と話した。

散策後の討論会では、「町で話を聞きながらみんなで感動した。共感する楽しみを旅に取り入れるといい」「食べ歩いたり、車から自転車に乗りかえたりして宮崎の良さを見つめ直したい」という意見が出た。

協議会事務局の谷越衣久子さんは「古い町並みや伝統文化、おもしろい人などその場所だからこそ味わえるのが旅の魅力。自分の生活文化をおもてなしの材料とすることで、地元の人にも励みになる」と話している。

（伊藤あずさ）